

令和 元 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06824

研究課題名（和文）映画における移動の意味に関する研究 イヴェンス、マルケル、ヴァルダの作品を中心に

研究課題名（英文）The research on the meaning of displacement in cinema: Joris Ivens, Chris Marker and Agnes Varda

研究代表者

東 志保 (Azuma, Shiho)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：00803165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、記録映画の歴史において重要な作品を残したヨリス・イヴェンス、クリス・マルケル、アニエス・ヴァルダの映像制作における「移動」の意味について検討したものである。成果として、以下の3つの事項が挙げられる。

1) アーカイブの調査によって、移動を通して制作された映画作品の生成過程、およびイヴェンス、マルケル、ヴァルダの交流関係の一部が明らかになった。2) 一次資料、二次資料、映像作品の分析によって、彼らの移動をもたらした社会情勢、およびポストコロニアルの思想の動向と映像作品の関係性を示した。3) 作品の美学的側面を、一次資料によって明らかとなった移動の理由との関連性において検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記に上げた研究成果の一部は、論文3本、研究発表4件の形で発表された。（論文3本は2019年夏に刊行決定）研究発表のうち2件は文化機関主催のイベントの枠組みで行われたものであり、学界のみならず広く社会に公開するべく積極的に活動を行った。学術的意義としては、三者の作品の関連性について「移動」を共通項として焦点を当てることで、個別の作家研究に新しい視座をもたらしたと共に、戦後ドキュメンタリー映画のひとつの潮流の再発見を促した。社会的意義としては、記録映画の表現における移動の役割を明らかにすることで、移動が一般的なものとなっている現代社会を再考する契機を促した。

研究成果の概要（英文）：The research studied the meaning of displacement in the filmmaking of Joris Ivens, Chris Marker, and Agnes Varda, the representative documentary filmmakers in the history of cinema. Research achievements are as follows:

1. As a result of the investigation of archives, I showed a part of creation process of the films by Ivens, Marker, and Varda, which is characterized by displacement, and the interaction of these filmmakers come to be apparent. 2. Through the analyse of films which reflects the research on the primary and secondary source, the relation between the films and the social situation and the post colonial thought come to be apparent. 3. The aesthetic side of films are analyzed in the relationship with the reason of displacement by the filmmakers, shown by the research on primary sources.

研究分野：映画学

キーワード：ドキュメンタリー映画 移動 クリス・マルケル アニエス・ヴァルダ ヨリス・イヴェンス

1．研究開始当初の背景

申請者は、博士論文にて、フランスの映像作家、クリス・マルケルの「遊歩」のモチーフに着目し、作品分析を進めた。残された研究課題として、他の作家との影響関係や交友関係、親交のあった映像作家による作品との関連性を考慮することの重要性が挙げられる。それゆえ今後の研究では、博士論文で扱った都市のなかの「遊歩」という概念を「移動」という、より広い枠組みからとらえ直し、マルケルと親交があり、マルケルと同様に世界各地を旅し記録映画を撮ったヨリス・イヴェンスとアニエス・ヴァルダとの関わりについて考察した。というのも、これまで、イヴェンス、マルケル、ヴァルダという、それぞれの映像作家について、個別の研究はあっても、三者を比較して関連づけた研究は今までされていない。もちろん三者間には交流があり、各映像作家研究の文献において、そのことは論じられている。しかし、それはあくまで補足的なものに留まり、三者の関係性について中心的に研究・分析したものはない。そこで、三者の作品の共通の特徴である「移動」という概念を導入することで、三者を関係づける軸ができると考えた。それは、「移動」が、三者の作品の共通のジャンルである記録映画のなかでどのような意味を持っていたかを検討する糸口となるものである。

2．研究の目的

記録映画史に残る重要な作品を残したイヴェンス、マルケル、ヴァルダの映画制作において、「移動」がどのような役割を担ったか、その理由を作品の生成過程を検討することで明らかにし、さらに、彼らが「移動」をすることで表現した映像美学と社会的・思想的背景の関連性を明らかにすることが本研究の目的である。三者の映像作品のつながりに「移動」というモチーフから焦点をあてることで、世界各地をカメラに収めた初期の記録映画にみられる異国趣味や移動の持つ意味の変質の経緯を明らかにしていき、イヴェンス、マルケル、ヴァルダの映像表現のあり方を示す。つまり、大きな目標としては、個別の映像作家についての研究を超え、ヨーロッパの記録映画における「移動」の系譜を検討する、映画史に新たな視座をもたらす研究とすることである。

3．研究の方法

イヴェンス、マルケル、ヴァルダの「移動」に特徴付けられた映像作品の生成過程を、映画作品の企画書、出資者や配給会社とのやり取り、作家の私信・日誌やインタビュー、関係者の証言などの一次資料をもとに明らかにする。その後、明らかにされた作品の生成過程と、三者が生きた時代の社会的・思想的背景、そして各々の映像美学との関連性の検討を行う。

平成 29 年度は、先行研究の整理・検討、一次資料の調査を中心に作品の生成過程を明らかにした。平成 30 年度は、一次資料の更なる追加調査と同時に、作品の生成過程と社会的・思想的背景の関連性、および映像美学との関連性を具体的な作品分析を通して検討した。

4．研究成果

作品の生成過程を調査するにあたって、イヴェンス、マルケル、ヴァルダの作風に特に共通点が見られる 1950～60 年代を中心に、一次資料の収集と分析を行った。

1) 1950～60 年代の作品の生成過程の調査結果

<ヨーロッパ・ヨリス・イヴェンス財団アーカイブ、シネマテーク・フランセーズ、パリ国立図書館、ジュネーブ市現代美術基金における調査>

ヨーロッパ・ヨリス・イヴェンス財団アーカイブ所蔵の作品の企画書や私信、日誌、インタビューなどの調査を通して、1950～60 年代のイヴェンス、マルケル、ヴァルダの映画には、移動することで制作されたドキュメンタリー映画において間テクス的な関係がみられ、年長のイヴェンスが、マルケルやヴァルダを始めとする第二次世界大戦後のフランス短編ドキュメンタリー映画の潮流から強い影響を受けていたことが示された。それは、一人称的な語りや、フィクションとドキュメンタリーの境界への問い直しに特徴付けられるものであるが、こうした内省的・多義的な特色を持つ「エッセイ」としての映画は、政治的理由によって祖国オランダから追放状態にあったイヴェンスのディアスポラ的な立場と呼応するものであったということも、資料から読み取ることができた。

また、シネマテーク・フランセーズのクリス・マルケル展覧会にて公開された調査資料、ジュネーブ市現代美術基金の収蔵資料から、マルケルの初期の執筆活動とレジスタンス参加による政治活動の詳細も明らかになった。この経験は、マルケルのその語のキャリアを決定づけるものとなり、スペイン内戦の頃から、映画制作を通して反ファシズム闘争に関わっていたイヴェンスに共感を覚え、交流を持つようになる理由が明確に示された。また、ジュネーブ市現代美術基金の収蔵資料から、マルケルがアフリカにおける植民地独立運動に強い関心を持ってい

たことが示された。ここにも、オランダからのインドネシア独立を第二次世界大戦直後から提唱したイヴェンスとの関連性を見ることができよう。

そして、マルケルやイヴェンスが、旅のエッセイ・ドキュメンタリー映画を撮ることになった、中国やキューバに、ヴァルダが旅に出ることになった契機については、ヴァルダ本人のインタビュー資料によって、マルケルから推薦を受けた結果であるということが理解された。

<ルイ・リュミエール研究所における調査>

イヴェンス、マルケル、ヴァルダの移動に特徴付けられる、1950～60年代のドキュメンタリー映画制作に大きく関与していたのが、製作会社アルゴス・フィルムである。そこで、リヨンのリュミエール研究所に所蔵されているアルゴス・フィルムのアーカイブにて、製作・配給関連についての資料の調査を行った。その結果、イヴェンスとヴァルダは、最終的にアルゴス・フィルムと仲違いしたことが契機となり、みずから独立プロダクションを立ち上げたということが明らかになった。このことは、特にヴァルダにとって重要な転機となったと考えられる。というのも、ヴァルダは、ほぼ全ての映画作品を、作家であると同時に製作者として作ることになるからである。ヴァルダの作品で頻繁に表される、旅人、異邦人、ホームレスなど、根無し草的な人々への共感という主題は、自身の独立的な映画制作の反映である可能性が示唆された。

2) 社会的・思想的背景との関連性

1950～60年代のイヴェンス、マルケル、ヴァルダの移動の理由について、フランス共産党をはじめとする左派の政治思想が関係していることは、既に先行研究で示されていたが、三者とも既にこの時期から、ポスト・コロニアルの思想に影響を受けていたことが理解された。東欧社会主義圏での映画制作からパリに制作の拠点を移したイヴェンスは、インドネシアの独立運動以来関心を寄せ続けていた第三世界へ積極的に旅をし、マリヤチリにて植民地の問題を扱った映画を制作した。それは、1960年代後半から始まる、同時録音を駆使したマルセリーヌ・ロリダンとの共同作業へと繋がっていく。ロリダンは、アルジェリア戦争についての自主映画を制作した作家でありポスト・コロニアルの思想に強い共感を示していた人物である。つまり彼女との出会いの場となったパリを拠点に、世界各地へ移動し続けたなかでの映画撮影が、後期イヴェンス作品の大きな土台となっていることが確認された。

また、マルケルがアフリカ芸術とその現代における可能性について、1950年代初頭から、深い知見を示していたことが確認された。マルケルがブレザンス・アフリケーヌと交流があったことからわかるように、それは、フランス領植民地出身の黒人の文化人・知識人による文学運動「ネグリチュード」から影響を受けたものであると考えられる。ロシア・アヴァンギャルド、シュルレアリスムなどの1920年代の前衛芸術運動とともに、ネグリチュードがマルケルの映像制作の背景にあったということが理解された。

こうした、イヴェンス、マルケルによるポスト・コロニアルの思想・文化運動への関心は、年少のヴァルダにも引き継がれた。キューバへの旅から始まった、第三世界主義への関心は、ヴァルダのアメリカ西海岸への移動によって、更に深められることになる。アメリカ西海岸への移動は、夫ジャック・ドゥミの仕事の関係によるものであったが、ヴァルダはそこで、ブラック・パンサーについてのドキュメンタリーを撮影し、反戦ヒッピー文化を扱った映画も制作している。実際、ヴァルダのインタビュー資料の読み込みにより、1960年代後半から始まるアメリカへの移動の経験が、彼女の映像制作に大きな影響を与えたことが示された。

3) 映像美学との関連性

1950～60年代の移動の経験は、イヴェンスの映画表現の幅を広げるものであったといえる。というのも、この時期に、イヴェンス映画は、私的かつ詩的な映像・音声表現への移行を果たすからである。前述したように、それは、パリを拠点にしたということも大きな理由の一つであるが、亡命状態であったということ、第三世界の文化運動に触れたこととも関係していたと考えられる。1960年代後半からイヴェンスは、ラオス、カンボジア、ベトナム、中国にて、同時録音を駆使した政治映画を撮ることになり、エッセイ的な映画表現は一旦休止するが、それは、遺作『風の物語』にて、同時録音と呼応する形で復活することとなる。つまり、1950～60年代の移動の経験は、イヴェンスの映像表現の展開に最後まで大きな影響を与えていたのではないかとということが示唆された。

そして、マルケルとヴァルダによる移動の経験は、ふたりの越境的な映像制作の試みと呼応するものと考えられる。1960年代初頭に既に映画と写真の境界を問うような作品を作っていたマルケルとヴァルダの映像表現は、越境性という点において、2000年代に限りなく接近していくこととなる。写真、映画、インスタレーションを横断するような映像制作は、彼らのプリコラージュ的な美のあり方を表現するとともに、映像を展示空間にて呈示することで、映画を見るという観客の行為に物理的な移動を取り入れたものとも考えられる。写真、映画、インスタレーションというそれぞれのメディウムの特性によって、映像は再解釈され、再検討

され続ける、マルケルとヴァルダのマルチメディアを援用した取り組みは、映画館における映像への自己投影の体験とは別の体験をもたらす展示空間での移動的な鑑賞と通底するものではないかと考察した。

4) 今後の課題

今後の課題としては、アーカイブの更なる調査、および記録映画の歴史との関係の検討が挙げられる。ヨリス・イヴェンスについては、アーカイブが既に整えられており、十分な資料を分析することができたが、クリス・マルケルのシネマテーク・フランセーズ所蔵の資料については、全ての資料の整理が終わっておらず、未公開のものが多く残されていた。そのため、今後のアーカイブの状況を見ながら、更なる調査を進める必要がある。また、アニエス・ヴァルダのアーカイブに関しては、ヴァルダ自身が所有している製作・配給会社が工事中とのことで、そこに所蔵されている資料に関しては、データ化されているもの以外は閲覧することができなかった。それゆえ、ヴァルダに関しても、今後のアーカイブの状況を見ながら、更なる調査を進める必要がある。記録映画の歴史との関係の検討については、アンリ・ストゥルクやジャン・ルーシュなど、同時代の他の記録映画作家の映像美学、映像倫理との関わりが強く見られることが資料調査の結果、判明した。このことについては今後更に検討して行く必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Azuma Shiho, « The utilization of lightweight equipment by Jean Rouch and Chris Marker : Cinéma vérité and images of Africa », *Dispositif*, the journal of Cinema & Transmedia Institute, 2019 (in print). (査読有)

東志保、「ヨリス・イヴェンスのエッセイ映画『セーヌの詩』から『ロッテルダム・ユーロポート』まで」, Arts and Media, 大阪大学文化動態論専攻アート・メディア論研究室、第9号、2019年7月刊行予定(招待有)

〔学会発表〕(計 4 件)

東志保、「写真、映画、ブリコラージュ クリス・マルケルとアニエス・ヴァルダ」, 国際ワークショップ「イメージと時間：写真、映画、ニューメディア」, 大阪大学、2019年5月26日

港千尋、東志保、篠田勝英「クリス・マルケルのトランスポジション 写真、テキスト、アフリカ」, 第11回恵比寿映像祭日仏会館共催企画「クリス・マルケルのトランスポジション」, 2019年2月14日

東志保、「アニエス・ヴァルダのインスタレーションにみられるブリコラージュの美学」, 日本映像学会第44回全国大会、2018年5月25日

東志保、「クリス・マルケルの『レベル5』について」, クリス・マルケル監督作品『レベル5』日本語字幕版特別上映、アテネ・フランセ文化センター、2018年3月30日

〔図書〕(計 1 件)

東志保「交差する視線 ジャン・ルーシュとクリス・マルケル」, 千葉文夫・金子遊編『ジャン・ルーシュ(仮題)』, 森話社、2019年夏刊行予定(招待有)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。